



日本共産党の白川よう子 参院比例候補は1日、高松市の瓦町駅前新春宣伝し「被爆80年の今年、日本

## 白川よう子参院比例候補 高松で新春宣伝



定価 月100円 発行所 民主香川社 高松市藤塚町3丁目13-14 ☎(087)834-7311

政府は核兵器禁止条約に参加し、唯一の戦争被爆国としての役割を果たしていくときだ」と訴え、参院選で比例5候補を必ず国会へ送り、新しい政治の流れをつくらうと呼びかけました。

榎昭二香川県議、岡田まなみ、藤沢やよい両市議、中谷浩一県委員長が訴え。通りがかった市民から手が振られ、自転車を含めて聞く女性もいました。

白川氏は日本被団協のノーベル平和賞の受賞にふれ、広島県被団協(佐久間邦彦理事長)と年末に懇談すると、「『核兵

## 国に中小業者支援を訴え 民商の四国4県連

民主商工会の四国4県連は12月20日、約20人が参加して、高松市の四国経済産業局をはじめ高松国税局や四国厚生支局などに、高物価対策など中小業者支援の充実などを求めました。

物価高騰対策給付金など中小業者への直接支援、消費税5%への減税やインボイス制度の中止などを求め訴えました。

臨時国会で成立した大軍拡と大企業優遇の補正予算について「アメリカや大企業言いなりの二つの異常が見えてくる」と指摘し、「私たちはこうした悪政の大本をみなさんと力を合わせて変えていく」と決意を述べました。



組織的犯罪の裏金事件を忘れない。自民党の政治家の重鎮が高齢から、本場に墓場へ入るか認知症など健康問題で逃げ切れれば完全犯罪成立のようなもの。逃げ得を許さない。例えば、「能登半島の複合的大災害から1年経っても政府の動きが悪く遅れる復興・復旧」唯一の戦争被爆国の日本で日本被団協のノーベル平和賞受賞があっても幅をきかせる核共有論や核抑止力論」「福島原発事故があっても原発に再帰帰」など噴出する矛盾を忘れない。裏金事件のけじめに赤い羽根共同募金に8億円を募金した自民党の国民タマシの反省したフリを忘れない。(ま)

## 大鼓台異

日本で起きる矛盾や不条理が「日常」になってないか。例えば、「ウィシユマさんや赤木さんを忘れない」ことが日常を変える力ギです。あなたやわたしが起きた出来事を忘れずに記憶し、国民と対話し、ともに国民のための政治をつくりだすまで「おかしい」と声をあげ、あきらめずに運動し続けることが変革や希望を生み出します。

訴えに對しいつもより署名数が増え、協力的な人が多くみられました。二人組の婦人から署名とカンパ。ある初老のおじさんが、カンパ箱に1万円札をさつと入れて立ち去りました。署名はしなかったようですが、アツという間の出来事でした。

来の快挙。核大国をはじめ核固執勢力が進める核軍拡と核使用が叫ばれる中での受賞はひととき大きな輝きを持つものになる」と訴えました。

この1年の「6・9行動」は、田町交番前の人通りが一時よりさびれる中でそれでも粘り強く行ってきた。例えば1968年から開始して56年「やっこ」までこぎつけた」という思いと、「しまだ先が長い」という思いが交錯する中、「希望の光である核の禁止・廃絶に



参加者がより多ければさらに署名が取れる情勢です。

## お詫び

民主香川/1月5日=第2012号の「太鼓台」で、虎に翼の主人公の名前が「虎子」になっていました。正しくは「寅子(ともこ)」です。お詫びして訂正いたします。

菅原道真が讃岐の国司を務めたのは、八八六年から八九〇年までの四年間である。道真の祖父と父は高名な学者であり、母方の伴氏は、大伴旅人や大伴家持らの歌人を輩出した名門である。道真も日本で最高の漢詩人になった。

当時、讃岐は四万余戸あり、その国司は決して悪い地位ではなかったが、道真にとっては左遷にも等しい人事であった。四十二歳で地方への赴任に大きなショックを受け、送別の宴で涙を流し鳴咽したと記録されている。だが、道真は讃岐に赴いてはじめて庶民の暮らしの貧しさを知ったと言われる。

道真は讃岐の国司在任中に百四十篇の詩を詠み、それは『菅家文庫』巻三と巻四に収録されている。そのひとつ「法華寺白牡丹」(巻四の二五七)の歌碑が、国分寺町新居の法華寺に建てられている。当時、ここは国分尼寺であった。

讃岐の文学碑めぐり ②4  
讃岐の貧しい庶民の生活を詠んだ  
「寒早十首」菅原道真(八四五-九〇三)  
文・写真 深沢 雨根

歌碑が、国分寺町新居の法華寺に建てられている。当時、ここは国分尼寺であった。道真の最高傑作は、讃岐の庶民の貧しい暮らしを詠んだ「寒早十首」という漢詩である。

『菅家文庫』巻三の二〇〇、二〇九の「何人寒氣早」(何れの人にか、寒氣早き)の一行で始まる五言八行の詩十首から成っている。古代の庶民生活を知ろうと貴重な史料でもある。

十首はそれぞれ、逃亡先から送還された農民、他国からの流浪者、年老いた男やもめ、孤児、薬草園の園丁、駅舎の馬子、船の水手、漁師、塩売り、木こりの十人をあげて、「この人たちに、冬の寒さ



加藤周一は、菅原道真の登場を「その後の日本文学史を視野に入れるとき、まさに画期的であった」(『日本文学史序説』上巻、百二頁)と高く評価した。その理由として「寒早十首」をあげ、「庶民の飢えと寒さをうたったのは、憶良の『貧窮問答』以後、平安時代を通じて、ただ道真の詩集があるだけ」(百十六頁)と述べている。

道真が詠んだのは、讃岐で実際に目撃したものであった。道真は白居易から漢詩を学んだがその大きな影響を受けながらも庶民の生活の貧しさを実際に目撃すること、その心情表現は模倣の域を超えたものになったのである。

が早くやってくる」と道真は詠む。彼らを苦しめる瘦せた土地、貧困、飢餓、病氣、孤独、重税、失業の怖れ。九世紀の庶民の苦しみや悲しみが、切々とうたわれている。